

---

# 魔王と勇者のタクティクス

kamome23

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王と勇者のタクティクス

### 【NZコード】

N7366X

### 【作者名】

k a m o m e 2 3

### 【あらすじ】

本が読むのが大好きな青年がいた。

戦略本から兵法書までかたづらしかつら読んでいった。

愛読書は「孫子の兵法」だ。そんな青年が突如穴に落ちた。そこには、薄気味悪い塔には似合わない一人の少女がいた。そして突然「私たち……魔王軍を救ってください」といわれ、そして青年は返事をして……

勇者の役を買って出た青年と魔王の娘が作り出す。

とても壮大な戦略とは……！？

# 第一話 「てか……魔王の娘が勇者を召喚してやるーーー。」

俺の名前は、両羽巧といつ。

学校行きながらでも本を読み。

帰つて来ても本を読むそんな生活を送つてゐる。

ちなみに愛読書は「孫子の兵法」だ。

そんな読書好きでさうに戦略本や兵法書などをこよなく愛す。  
俺は、時々生まれてきた時代を間違えてんじやないかと思つときもある。

そんな俺は、今日も孫子を読みながら、学校からの帰り道を歩いていた。

「兵とは国の大事なりつてね、ああ一度でもこいからこんな時代に行つて兵隊を使いたいなー」

そんなことを考えて歩いていたため田の前に大きな穴があるのも気づかなかつた。

「わあーーー

そのまま俺は落ちて行つた。

時は少し迫のまゝ、

「えーとまづは、河童の涙に…」

薄気味悪い塔には似合わない水色の髪の少女がいた。

「えーと次は…竜の糞…うわくそ！」

周りには誰もいなくてただ少女が必死に何かの準備をしていた。

「あとは、この黄金をつと、これで勇者を呼び出せる。」

その少女は目が輝いていた。

彼女の名前はエリナ。

なんと魔王の娘。

「うんしょ、うんしょっとあと少しで完成する。魔法陣で勇者を呼び出して救つてもらわないと……」

エルナは、必死に混ぜて

「できた！」

ついにできたのだった。

それを周りに流し込んだ。

「よし完成した！」

周りには、紫色の魔法陣が描かれている。

「今ここに召喚の儀式を開始す。勇者を現世界へと呼びたまえ。」

上に大きな穴が開いた。

「わあ～～～

突然大きな声にびっくりはしたが、一人の男が落ちてきた。

「この人が勇者様……」

「いてて、なんだこりは？？」

周りを見渡すと、薄気味悪い石でできた部屋の中にいた。

「あなたは勇者様なのでですか？」

「はあっ勇者！？誰が！？」

タクミは、状況が呑み込めず。ただ突っ立っている。

「あなたたです！」

「それです。」

「なんで？？」

タクミは、いきなり勇者と言われても何のこかよくわからていな

「勇者を呼び出す儀式を行つたのです。」

「そうなのか」

エリナは、泣きそうな顔をしながら言った。

私たち…………魔王軍を救ってください」

その時タクミは、

その時タクミは、急に魔王軍を助けてうと言われて困惑して

魔王軍を救ひ

〔はい さて さて〕

「え、と、向こうの、

「私のお父様の魔王が、神族の裏切り行為にあい。死んでしまいました。そして今私が魔王の代理をやっています。」

「お前、魔王の娘なのーー?ー?ー?」

タケミは、目の前のかわいらしい少女が魔王の娘なんて信じられないかった。

「はい、それで、そのために私たちは、最後の希望を託して勇者様をここに召喚したのです。」

「てか…魔王の娘が勇者を召喚しちゃまずいだろ…。」

「確かに」……

顎に手を添えて納得したような顔になる。

「いまじろかよ……」

タクミはこのかわいいらしげ魔王様に呆れていた。

「しかし…そんなだけピンチなんですね…。」

「どれくらいやばいんだ！？」

「魔王軍は、分散してしまい今私のもとここにいるのせ、たったの5千です。」

涙ぐんだ田で行つてくれる。

「5千でもすごいな、もともとどれくらいたんだ！？」

「100万です」

「はあ！100万！…どれだけ減つていいんだよ！！」

100万という数字を言われてタクミは、腰を抜かす。

「ほめたり、怒つたりどつちかにしてください」

「いや、だつて……なつ！」

「なに憐れんだ田で見てるんですか！！」

「仕方ないだろ！」こんなこと聞いたんだから。

エリスがタクミに詰め寄り

「それで助けてくれるんですか？？」

「それは置いといてだ。もし俺が帰りたいと言つたら返してくれるのか？？」

「それはちょっと……召喚はできたのですが、戻すのは……」  
下を向いて返事をする。

「やっぱりな」

タクミはため息をついた。

「『のまま、『にいるしかないんだから協力してやひつー』  
ものす』」と喜んだ顔で

「本当ですか！？」

「ああ」

「やつた――――」それで百人力です  
手を挙げてバンザイのポーズを何回もしている。  
「いや……ちょっと待て……俺は力なんて強くないし武術なんて少しか  
じつたことがある程度だぞ」

自分の手を組んで広げる動きをして  
「えつ……じゃあ、一撃必殺技とか、半径5キロメートルを焼き切  
くせる魔法とかは？？」

「おこおこ、どんだけ勇者に夢見てるんだよ……」

「本当ですか！？」

「本当だ。俺は腕っぷしは弱い……ただし作戦を考えるのは得意だ  
ぞ」

「そうですか……しかし、『の勇者を復活できたといわないと士  
氣にも影響が出ますし……』

エリナが目をつぶるのを止めてきたのに負けた巧は  
「わかった。わかったよ、勇者の役やつしてやるよ……」

「嬉しいです！」

エリナ踊っている。

「まあそんなに喜ぶなよ期待できるほど強くないんだから…」「それでもいいです！！」

タクミは、何かを思い出して物ふけな顔をする。

「まあいいけど、置いてきた妹が心配だな」「妹さんがいるんですか？」

「ああ、俺とは正反対の感じで、腕っぷしが強くて戦闘になつたら真っ先に突っ込んでいくようなやつなんだが…いれば楽なんだがな…」

タクミは四人家族で武道家の父親にアクション女優の母親から生まれてきた。

なんでこんな親から俺が生まれてきたのか不思議で仕方ないとタクミは思っている。

「召喚では、呼びませんし仕方ありませんよ」

「そりだな、まあいいや。それより田標は？？」

「田標ですか？？」

「そうだ。何事の居ても田標があつたほうがいい」

エリスは、考えて

「それなら、静かで安全な場所を求めるつていつのはどうですか？」

「はあ～～そんな甘いこと言わずにもつと大きな田標もでよ…！…たとえばこの世界を奪つてやるとか」

「そんなのいやですよ！」

よっぽど嫌だったのか、語気が強くなる。

「つべこべ言わずにもう決定した。よし田標は…・・・

タクミは、エリスのことを少しだけ考えて

『世界をぶんざつして静かな世界にいやかわーーー』

セーヒー、魔王と勇者が手を組んだ。

## 第一話 「全員、川に飛び込め……！」

「世界をぶんぢって静かな世界にわせるつてなんですか……」  
エリナがとても怒ったような顔をしている。

「いやーだつて、エリナ言つたじやないか静かな場所を求めてるんだろ」

飛んだり跳ねたりして髪を上<sup>ア</sup>させながら

「そうですけど、それと世界をとるは関係ありません。」

「いや、手つ取り早い方法だ……！」

タクミは押し切る。

「どこかですが……もういいです」

「ふく  
脹<sup>ふく</sup>れた顔になつてしまつた。」

「そんな事よりエリナ今の魔王軍の状況を教えてくれ  
「そんなん聞いてどうするんですかー」

まだすねている。

「世界を取らないといけないからな！」

さげすんだ目で

「まだそんなこと言つているんですか？今は神族によつて統治せ  
られていて、それを人族が勝手に魔族を追い立てていてるんですから  
エリスの言葉や視線を無視し

「なるほどな！敵は神族かー！それなら人族を仲間にした方が手つ  
取り早いな！」

「何勝手に話を進めているんですか……！」

「よし、これで倒す相手は、神族からだな。」

「もう人の話聞いてくださいよ！」  
エリナが腕をぶんぶん振っている。

「まあそれより。この世界って魔法があるのか？」  
「はいありますよ」

ちよつと語気がすねている感じに聞こえる。

「例えばどんなんがあるんだ？？」  
「そうですね」攻撃魔法から、防御魔法、補助魔法、儀式魔法なんかがメジヤーですね」

そこいらへんは俺のいる世界のRPGと変わりないな…  
俺のいるじやなくて俺のいた世界か… いって悲しくなる。

「なるほど、次に兵種は？」

次々とタクミが質問するがエリスは、仕方がないという感じで返答をする。

「今味方にはいるのが、ゴブリンとかスケルトン、リザード【ウイッチがいます。】

「それぞれの特性は？？」

「えーと、『ゴブリンが棍棒と』が武器で……スケルトンは、防御が最弱だけど何回でも生き返れる。そして、リザードが頭がよくって。ウイッチが魔法使いつて感じ。」

「なるほど」

「よつする」、

ゴブリンが雑魚歩兵。

スケルトンが「」。

リザードが指揮官タイプ。

ウイッチが魔法攻撃つて感じか……意外に心もとない魔王軍…

「本当はまだほかにもいるけど、どつかに行つちゃつた」

「それなら、これから仲間にすればいいことだから大丈夫だ。」

「仲間につて本当に世界を取るつもり?」

エリスは、タクミの言つていることを鵜呑みにできなかつた。

「ああ本当だ」

「変な勇者を呼び出しちゃつたよ〜〜」

「お前が呼び出しておいて嘆くなよ」

タクミが拳骨（ゲンコツ）を一発かます。

「いつた―――暴力反対だよ!…」

エリナは、頭を押さえている。

「本当に魔王の娘なのかこいつ……そんなことはさておき次は敵だ。まずは一番の目標である。神族について教える!…」

「はいはい」

エリナが諦め顔をする。

「神族は、一番トップがオーディンでその下に11人の部下がいる。その部下がワルキユーレで騎士と魔法使いがいて、攻撃力防御力ともに高い。」

「ちょっととまて…それってかなり厳しくないか…」

「そりなんだよ!あと神族はみんな空を飛べるから

「なに!空からの攻撃ありだとどんなにチートな種族なんだよ」

タクミは、神族と戦う場合そういうの被害をもたらすと考える。

「でも、神族はあまり戦いに介入しない。」

「それは、本当か? ?」

安心したような顔になる。

「うん、人族が神族の配下になつて魔族を攻めているの

「なるほど…それで敵の本拠地は? ?」

「神界」

エリナがたつた一言ボソソッとつぶやいた。

「神界！？深海じゃなくてか！？」

エリスに詰め寄る

「そうです」

「それなら攻めようがないじゃないか」

「うん…でも一応地上の拠点があります。」

エリスが言つてから考えもせずに

「よしそこを攻略する目標に入れよう

「本気ですか！？」

「ああまつてるよ～～神族！～！」

片手を上にあげる

その時ゴブリンらしき奴が慌ててこちらに来た。

「大変です。魔王様！！人族の襲来です。どうすればいいでしょうか？」

「なんですって！！」

エリスが青ざめる。そしてタクミがさつき話していることを思つて出し

「おいおい、5千もいるの簡単に突破されすぎだらう

疑問をぶつけてみる

「いや、主力は河口において来てします。今は50しかいません。」「はあ50！～おいそこゴブリンA～敵兵力は！？」

タクミもこの状況に内心焦る。

「ワイは、ゴブリンAじゃないジヨンだ。」

「名前はどうでもいいから敵兵力は？」

「約一千！」

「どうしましょ～～タクミさん」

瞬間に作戦が思いつく。

「それならいい作戦があるぜ～」「なんですか」

エリナが目を輝かす。

「孫子の兵法にも書いてあつたが、敵が十倍以上の場合は、逃げるべしつてな」

「それって……」

エリスは、わかつてしまつたがわかりたくない顔をする。

「おうそうだ！――」そこから逃げるぞ――！」

「でもどこに？？」

エリスは、タクミが逃げるといつたのでどこに逃げるか不思議だつた。

しかし、タクミはさも自然化のよつて

「たしか河口に主力がいるんだろ」

「そうです。でもそこまでの道が敵に包囲されていて川しかありませんよ」

「それなら川を下るしかない」

「どうやって船とかありませんよ？」

エリスが考へている川を下る手段は、船しか思いつかない

「俺に任せろ！――とにかく撤退だ――」

「どうすれば……」

ゴブリンAは困っていた。

「タクミさんに従つて川まで逃げます。」

エリスは、タクミにかけてみるとこにした。

勇者として呼び出されたタクミを・・・

「へい！」  
ゴブリンA<sup>ジョン</sup>が走つて行つた。

「タクミさん川はこつちです。」

「おう！さすが頼りになるな！」

二人は、走つて外に出て周りにいた魔族とともに川へと向かつ。

2人 + 50人は、川にたどり着く。

川の広さは、そこまで大きくないが川の流れが速かつた。

「これからどうすれば？？」

「よし、魔王の娘なら魔法位使えるだろ？」

「はい！…」

「それならここらへんにある木を全部切つて川に流せ……！」

「できますけどどうするんですか？」

「みんなよく聞け、川に流されてる木にしがみついて流されろ～！  
！」

タクミは、大声で叫んだ。

「本気ですか！？」

エリスも、タクミに負けないぐらいの声で言つた。

「本気だ！みんなは生き残りたいだろ？ それなら一緒に行こう～！  
！」

この絶望的な瞬間をなくせる期待が大きかつたので賛成の嵐だつた。

「「「「「おお――――――」」」」

この様子を見たエリナが

「本当にやる気なんですねわかりました。風の大きいなる力を鎌鼬となれ！！」

その呪文とともに周りにある木が切れて川の上の空中を待つて着水した。

「さすが、魔王の娘だけあるな」

「それほどでも」

少しテれるエリス

「全員、川に飛び込め！！」

バシャーン

一斉に川に飛び込んでいく。

「エリナ！俺につかまれーーー！」

「えつ・えつ・！」

「大丈夫だ死ぬときは一緒にだからーー！」

「そんなの嬉しいもありませ——ん！——ん！」

## バシヤーン

そしてタクミとヒリナは川の中えと消えて行つた。

第三話 「部隊編成をなめるなーーー！ 基本中の基本だぞーーー！」

「エリナ！俺につかまれ！！」

「えつ！えつ！」

一大丈夫だ死ぬときは一緒にだから！！

— そんなの嬉しくもありませんや — — ん!!」

そしてタクミとヒリナは川の中えと消えて行つた。

「エーヴィング... フル... タク// わえへ...」

エリナが必死に木にしがみついている。ただし、魔法を使ってずいぶん楽な状況を作り出している。

「タク!! セニ... ライ...?」

エリスは木にしがみつきながら、周りを見渡そうとした。

「俺は……………だ！」

聞こえたほうを見てみると確かにいた。

「タクミさん大丈夫ですか？」

タクミは、ちよつと木と木の間に挟まっていた。

「本当にですか？」

「ああ大丈夫……いややつぱだめ、エリナもつ一本の木を飛ばしてくれ……」

「ええ……でも、誰かいたら困るじゃないですか……？」

「大丈夫だ誰もいないから！」

タクミはまつたく見ずに返事をした。

「本当にですね！？」

「早くしてくれ……！」

悲痛な叫びが水で響いた。

「もうわかりましたよ！風の理に<sup>じぶんぢぶん</sup>おいてそれをつかやぶる突風となれ……！」

エリナがいつた瞬間片方の木が飛んで行つた。

「助かつたぜ～」

タクミはエリナと一緒に木へと移つた。

「なんどとばされてハリマンね～～～！」

なんか真上に向かつて飛ばされている物体がある。

「なんか聞いたことある声だな、ああの時のゴブリンAか……？」

「どうしましょう～～？」

エリナが慌てている。

「それくらいで死んじゃあそこまでだつたんだ。ありがとよ～ゴブ

リンA」

手を振る。

「死んでおりまへん～～！」

ゴブリンA<sup>ジョン</sup>が、別の木へとしがみ付いて言った。

「おお生きてたか～～ゴブリンA～～死んだかと思つたぞ

「勝手に殺せんとこでやーーーあとねこは、ジョンやーーー」

「あどぞれくらいいだ????」  
ゴブリンAの突つ込みを無視したタクミは、

「十一月一日から二ヶ月間」

「そうですねあと数分でしようか」

「よし! その時が来たら、この木を飛ばしてくれ!!」

「何でですか？？」

タク//のまつてこねると

信じることにした。

タウニが大吉で叫びござ。

「木を離して、泳いでけ――――！」

全員不満そうな顔をしたが、方法がなかつたため泳ぎだした。川岸には、味方らしき魔族が縄を投げたりしている。

「エリス、かりつかまれよ！！！」

卷之三

ヒストタクミは一  
ま

「  
」

川の流れが思つたより強く流されかねる。

タクミは、こんな時に運動神経が良ければと嘆く。

「エ...リス...ふはつ...何とかしろ...」

「……そんな……」といふても、無責任な！

「……いいから……はやく……魔法……を使え……！」

「……最初から……つかえ……ばよかつた……のに……」

タクミは、この世界で魔法を使えることをまったく頭に入れていないかった。

タクミが心の中で

「ここには、魔法を使えることを頭に入れておかないと」

と思つた。

突然軽くなつた。

「何で！？」

隣を見てみるとエリスに周りが光つていて

それで、タクミはエリスが魔法を使つたのだと気づいた。  
タクミは、川岸に行こうと必死に泳いだ。

エリスを抱えて、

「あれ……重い……」

エリスを見ると周りの光が弱まつてきた。

「やばい！！」

タクミは、エリスの魔力が少なくなつてていると思つた。

「早くいかないと！――」

その後すぐに繩をつかんで何とか岸に上がる事が出来た。

「はあーはあー……大丈夫か？エリス？？」  
エリスの様子を見るとぐつたりしていた。

「おい、起きる――」

バンバン

背中を思いつきり叩く。

そうすると、

「「ほっ！ げほっ！ いきなり叩かないで下さ」「よー！」

咳き込みながら怒つているエリスの様子を見て、ほっと一安心するタクミであった。

太陽が真上にあるから、曇ぐらいだな

「エリス様～～～～～！」

大声で叫んでいるトカゲみたいなのが一足歩行で歩いていた。

「ああジョージさん！」

「大丈夫ですか？ エリス様！？」

「はい何とか」

「あの…エリス。こいつ誰だ？」

「この人は、リザードのジョージさんです。昔から指揮を執つもらっています。」

「なるほど」

「こやつは誰ですか？」

ジョージは、あやしい目でタクミを見た。

「この人は、勇者様です。」

「こんな、何も取り柄がなさそうな奴がですか！？」  
訝しそうな目でタクミをまだ見ている。

「なんだ！？ リザード！？」

挑戦的な態度で打つて出るタクミ

「わしの名前は、ジョージだ！！」

「わかつたが、俺が勇者様だ！！」

「そうです。ジョージさん。この人が本当です。」

「エリスがタクミに肩入れしたので

「それなら信じましよう。」

ジョージは渋々頷いた。

「それで、生き残った人はどれくらいですか？」

エリスが聞いている部下思いな魔王様のなのだ。

「はい… 31人です。」

「そうですか……」

表情が重くなる。

「それでも、包囲された状況からみると、ましです。」

「そういうてくれると助かります。」

「さすが、頭がいいだけはあるな！」

「タクミさんこれから、どうするんですか？？」

「うーーんとまずは、部隊の再編だな。」

「そんなことするんですか？」

「部隊編成をなめるなー！！基本中の基本だぞーーー！」

「確かにそうですね… それなら賛成です。」

「ジョージさんも賛成なら…」

おそるおそる承諾するエリス。

「ああまずは、部隊再編からだーーーリザードロ一緒にがんばるぞーーー！」

「ジョージだーーー！」

そうして、無事生き残った魔王と勇者は、部隊再編を始めるのだった。

「何か最初からみみつちいな」

## 第四話 「神族つておつかないな……」

「それでですね。タクミ殿……言ひにくいことなんですねけど……」「何だ？ジョージ？？」

「エリス様が、召喚の儀式を言つている間に、魔王軍の大半が逃亡してしまって、今800しかいなんですよ……」

「何でそのことを早くいわない……」

タクミの叫びが木靈した。

「えつ！ 本當ですか！？」

「はい……エリス様今残つているのは、古参の兵隊ばかりです。」

「そうなんですか……」

エリスが悲しそうな顔をする。

守つて行こうと思つてゐる矢先に集団逃亡したからだらう。

「それなら、別いいじやないか、それに残つてゐる奴らは、古参なんだろ！？」

「そうですね」

「新兵が、どんなにいよつとも経験をつんだ奴らには、勝てないからちようどいいかもな。それで、残つた兵力は？」

タクミにとつては、過去より今のほうが対背だつた。

「はい、ゴブリンが600、スケルトンが100、ウイツチが150、リザードが50です。」

「なんか……スケルトンがすごい抜けているな……。よしわかつた、密に編成してくれ、戦闘部隊と特殊部隊、それに近衛部隊だ。」

「その……特殊部隊とは？」

初めて聞く言葉だらうから、簡単に説明をする。

「もつとも危険な任務をする部隊だ。だから、有能な奴を選んで、

そつから志願制にしてくれ。近衛部隊はエリスの護衛専門だからそこまで兵力をさかなくても大丈夫だ。」

「わかりました。エリス様は、それでよろしいですか？」

「はい、指揮はタクミさんに任せようと思うので…」

「それなら、ただちに編成をします。」

リザードンは、走つて消えてつた。  
ジョージ

「なあエリスこの近くに町はあるか??」

「はいありますよ…でも何するんですか?」

「そりや、野宿はいやだから泊るところを探すんだ。」

手をぶらぶらさせて疲れていることをアピールする。

「なるほど……ってここの人たちを置いていくんですか！？」

「そりや、魔族がいつたら。即戦闘になつちまう、その分人族に見える俺たちなら大丈夫だろう」

「そうですけど…おいていくのは……」

とてもためらいがある様子で悩んでいる。

「大丈夫だつて」

「そうですか…」

「おい、そこのゴブリン」

「はいな」

また、同じ顔を見て

「つて、ゴブリンA生きていたのか??」

「先ほどは、ありがとうな、わいを飛ばしてくれて…」

笑いながら眉間に上げている。

「まあ…気にするな…！」

「気にするわ…！」

ジョンが近くにある角材を持った。

「二人とも落ち着いて」

取つ組み合いを始めようとしていた。

「魔王様に免じてゆるす。」

「誰がお前に許してもらわなあかん！…」

「もう……一人ともケンカしないでください……ジョンさん私たち  
は近くの町まで偵察しに行くので、今日はここに戻ってきません。」

「おお～～魔王様に名前をおぼえてもらつた…感動や～～」

涙を流している。

「それじゃあ、とつとと行こうぜエリス」

「はい」

一人は、近くの町に訪れた。

「意外に広いな」

「そうですね～」

その時に橋を渡る一団がいた。

「あれは……」

一番偉そうな人が何かをしゃべっているのが聞こえた。

「くそつ、逃げられた！！せつかく魔王の娘を捕まえられるチャンスだつたのに…しかも、追撃したら木が降つて来て、退却せざる負えない状況になつたし……くそつたれ！…！」

「なんか…怖いですね」

「あれは、俺たちを追撃した部隊だな、それに見事に俺の作戦は成

功したな！」

「えつ！何のですか？？」

「お前に木を、後ろに飛ばしぐれって言つただろ。」

「ああ……確かに」

エリスが納得した顔になつた。

「それでの被害だな、たぶん。」

「へえ～意外に考えてたんですね

「意外にとはなんだ意外にとは…」

拳骨をくらわす。

「いったーい！ ほめたんですよ私！？」

「何かむかついたからな」

「理不尽な！？」

そうして、戯れているときに、突然空から誰かが来た。  
甲冑で身にまとつた女性だ。

「何だあれば？」

「あれば…まさか！！」

エリスがビビッてる。

「おい、エリスどうしたんだ？？」

「あの人たちが神族です。早く逃げましょう。」

エリスは、俺たちを捕まえに来たかと思つてゐるんだ。

「なるほど、あいつらが…」

神族は、背中に羽を生やしていた。

「ちょっと待て、どうやら俺たちじゃなによつだぞ。」

「えつ…」

よく見ると、人族の隊長に向かつていた。

そしてその隊長が慌てて、

「何でございましょうか？ フレイヤ様」

「エリス、フレイヤって誰だ！？」

「フレイヤは、神族の一番槍と言われている人です。」

「なるほど、強いのか……」

「なんじは、人身売買や売春行為で多額のお金稼いでいたとは本当の事か？？」

フレイヤが、人族の隊長に問いかけていた。

そうすると、隊長は、青ざめた。

「い、いえ……何のことをおっしゃっているんですか？」

「そなたが、不正な行為で金を稼いでいるのか。と聞いている。」

「そんな事する筈が無いじゃないですか！？」

フレイヤが剣を構えた。

隊長が後ろに下がつて行つたが、橋の手すりにぶつかつた。

「オーディン様より、そなたが嘘をつかなければ軽い罰でよいが、嘘をついた場合殺せと言われている。」

「ひつ！…ひつ！…何で…！」

「お前に最後のチャンスを与えたのだが、残念だ。」

「つ…！」

次の瞬間。

隊長の頭が吹っ飛んで、体は川へと落ちて行った。

「肅正完了。そなたたち行つてもよいぞ」

後ろに待つて行つた兵たちは、みな走つてこの場から去つて行つた。

「エリス……神族はあんな感じなのか！？」

「はい、そうです。人族、魔族関係なしに、肅正していっています。」

「神族つてあつかないな……」

タクミ自身、その光景を見ているときにつばを飲み込んでいるのに気付いていない。

フレイヤがこちらを見た。

俺は、一步も動けずに固まつてしまつた。

そして、田線を上にあげて飛んで行つた。

「俺たちを見逃したのかな？」

「はい……たぶん……」

「こんなところはないで、さつさと行こうが」

「そうですね」

二人は真っ赤な夕日が見える中、宿屋を探しに街の中へ駆け足で入つて行つた。

## 第五話 「……勇者が魔剣を持つかー!? 普通ーー!」

ここは、ヴァルハラ宮殿。

神族の唯一の地上拠点。

そこには、大きな翼をもつた女性と、甲冑で身にまとつた女性がいた。

「オーディン様ただいま帰還しました。」

甲冑で身にまとつた女性がひざまずき、そう言つた。

「よくやりましたね。フレイヤ」

大きな翼をもつた女性が返事をした。

「は、はい。もつたいなきお言葉……一つ報告しなければならないことがあります。先ほど訪れた町で魔法の娘ともう一人不思議な男がいました。命令になかつたために放置しました。」

「魔王の娘ともう一人の男は、別の世界の勇者です。」

下に向いていた顔をあげて

「勇者! ? すぐに殺した方がいいのでは?」

「大丈夫です。すでに対策を講じてあります。もうすぐ現れるでしょう」

一人の少女が歩いてきた。

「まったく、バカ兄貴がいなくなつたと思えば、なんでか私までこんな変なところにいるのよ」

「来ましたか、ようこそ、ヴァルハラ宮殿へ」

初対面の人ケンカ腰に

「あんた誰？」

「私の名前は、オーディン。改めて歓迎します。」

そして、両羽 巧の妹さん

そんなことを気にしていないかの様子で言った。

「何で私の名前と家のバカ兄貴の名前を！？」

突然兄の名前が出てきた少女は驚いた。

両羽 千夏さん。

ヴァルハラ宮殿でどうなっているのか知らない一人は、宿屋を見つけて泊ることにした。

宿屋の中は、ぼろくてランプが一つしかない暗い場所。

「今の状況じゃまずいな……」

「だから、行つてるじゃないですか！無理だつて！」

「まあ、それはおいおい考えるとして、魔法軍の歴史について教えてくれ。」

「急にどうしたんですか」

「いや、何で負けたのかと思つて。」

「それは・・・」

物思いにふけりながら語り始める。

私は昔を思い出す。

私たち魔王軍はお父様の魔剣と采配をもつて連戦連勝をしていきました。

このまま人族に勝つかと思われたのですが、そこで現れたのが神族です。

戦っていると突然空が光り翼を持つ人達が下りてきました。

そして、私たちの軍のみを攻撃してきたのです。

その時は、何とか逃げ偽る事が出来ました。

そして、たびたび来る神族を撃退はしていましたが、被害が多く。

お父様は、神族、人族と和平を結ぶことにしたのです。

そして神族はそれを承諾して、この戦争は終わりを迎えたように思えたのですが。

その和平調印の場で、神族の主のオーディンがお父様を剣で後ろから刺したのです。

その後、すぐ戦闘になりお父様は何とか生きている状況でした。

そんな時私に、

「後の事は、お前に任せる。この魔族を栄えさせせるのも滅ばすのもお前の好きにしていい」

と言つてくれました。

そして重臣たちに言葉を残してから息をしなくなり死にました。

その後魔王軍は、連敗の連敗を重ねて自然に崩壊しました。

生き残った少数の兵と共に私たちは逃げて、最後の希望を勇者召喚にかけたのです。

「そこから、タクミさんと出合って今といたるわけです。」

「なるほどなー」の話を聞くと神族が悪いみたいだな。」

タクミの言葉に反応してエリスが興奮気味に

「そうですーー私の…私のお父様を殺して…」

「わかつたから落ち着けて」

エリスは、はつとなる。

「すい…すいません。タクミさん」

「事情はわかつたから。」

「それで……次に行きたいところが出来ました。」

エリスは突然、決意をした顔になる。

「行きたいところ?」

「今の話で思い出したのですが、ここから西にある森に、お父様の使っていた。魔剣があるんです。それを取りに行こうかと思います。」

「

「魔剣!?」

「そうです。それをタクミさんが使えばこの状況を覆せると思つんです。」

「俺が魔剣!?」

「勇者なので魔法などの素質があると思います。」

エリスの一つ一つの言葉には、迫力があった。

「……勇者が魔剣を持つか!/?普通!—」

「でも、これしかないんです。お願いします。タクミさん!—」

「わかつたから」

俺は相変わらず、女の子のお願いには弱いらしい。  
だって男だもんしかたない。しかたないよねーーうん。

「よし、明日には出発したいから今日はもう寝ようぜ  
「はい」

そうして夜が明けた。

「それじゃあ、全軍に伝えてくれ目標は魔剣が眠る場所だーー。  
魔王軍一同、魔剣が眠る場所へと移動を開始したのであつた。

「本当に勇者が魔剣を持っていいのかーー？」

## 第六話 「お前にみんなが付いて来てるだろー!？」

魔王軍総勢800人は、一路魔剣が眠る森へと進路を取っていた。

エリスとタクミは、徒歩で移動している。

「なあ、エリス～馬はないのか？馬は～？」

まだ歩き始めて2・3時間しかたっていないのだがタクミは、すでに疲れた様子を見せ始めた。

「まだ、歩き始めたばかりじゃないですか！？」

エリスは、疲れなど一つも見せず歩いている。

「ちかれた～～」

「まったく、それでも男なんですか」

余裕満々な顔をして言う。

「そんない俺は、元いた世界では、アウトドアのひきこもりで町では通っていたんだから！」

「アウトドアで引きこもりっておかしくないですかーー？」

エリスがもつともらしいことを言った。

感慨深い顔をして

「外に出るのは好きなんだが、趣味がなくて引きこもりてばかりだつたからな

「引きこもって何してたんですか？」

「本ばかり読んでたかな」

「ちょっとびっくりして

「本ですかー？今のタクミさんには一番似合わないですねー！」

言つてから、エリスは殴られるかと思つて頭をガードしたが殴つてこなかつた。

「 そ う か も な 」

予想外の言葉にエリスは驚いた。

「確かに俺は変わったのかもな……」に来て

タクミは、今まで親父たちに囮まれていたせいか普通じや考えられ  
ない体験を何度もしてきた。

その中で本を読む行為は、心が静まるために好んで本を読みふけっていた。

そんな生活を送っていたタクミからしてみれば今みたいな生活もありなのかなと思う心があるのかもしれない。

卷之三

エリスは氣まずそうな顔を作る。

急にほつぺたをつかまれて慌てるエリスに

ればいいんだよ」

「アホなことってなんですか！アホなことって！」

先ほどの雰囲気とはうつて変わつて賑やかな感じになつた。

「もう…タクさんば～」

エリスは微笑んだ。

「何だよ。」

ちょっと照れたタクミであった。

その後小休憩を取りつつ進軍していく、あと四分の一まで差し掛かつたところで空がオレンジ色に染まり、太陽が沈みかけたために野営することになった。

「食料とかは、大丈夫なんだろ？」

「はい、あと2・3週間分はあります。」

「しかし、なんでそんなに準備がいいんだ？」

タクミは、敗走してきた魔王軍にしては、武器や食料が多くある。「それはですね…魔王上に会った秘宝やお宝をすべて売ったからです。」

苦笑いをする。

「それは、凄いな！お前もなかなかやるな～」

タクミがエリスの事をほめている。

「…そんなことないですよ……ただみんなの事を考えてですね…そうしたほうがいいかな～なんて思つただけなんですから」  
もじもじしながら返答をした。

「何照れてるんだ？俺はそこまでしてお金が欲しかったのに驚いているだけだぞ」

タクミは、ほめたことが照れ臭かつたのだとまかした。

「そんなひどいです。お金なんていりませんよー！」

「じゃあ、俺にくれよ」

ポケットから巾着みたいなものを出してきて

「今これだけしか…」

チャリン出てきたのは、銀貨3枚だった。

「まじか？」

「は…」

タクミが銀貨3枚をこれでもかつていつぐらに眺めた。

「本当にこれだけか？」

もう一回確認する意味も込めて聞いてみる。

「はい…そうです。」

「これからどうするんだ？」

「どうしよう…」

「質問を質問で返すな…！」

タクミは内心呆れはしたが、エリスはぬけているところがあるなど思つた。

「これからいつて魔剣を取つてから考えましょ…うよ…ね！」

「まかすよつに早口で最後の『ね』をやけに強調させた。  
「はあ～お前も人のことが言えないくらいいい加減だな」  
「そんなことないですよ～」

やけになつたように反論してくれる。

「いやいや、そんなことあるだろ。直覺してないだけだろ」  
「そんなことないです。」

二人がいがみ合つてゐるところ

「（）飯出来ましたよ……」

おそるおそる、骨人間が話しかけてくる。

「うん？誰だこいつ？」

「私は、スケルトンの骨子といいます。」

「そのまんまだな」

見た目通りの名前だ。

「わかりました。すぐ行きますね」

骨子は、どこかに行つてしまつた。

「ヒリス、さつきの事は水に流そつか  
「そりですね。流しちゃいましょ」  
よひやく一人の意見が一致した。

### 食事中

「こういう感じもいいな」  
周りでは騒いでいてとても楽しい感じになつている。  
「そうですね。私もそう思います。」  
エリナも周りを見ながらつぶやく。  
「私は、こんなみんなの笑顔が見たくて戦っているのかな～って思う時もあります。」

「そりか……軍を率いる者の心構えとしては十分だな」  
タクミは、にやっと笑う。  
「何で笑うんですか？」  
「これから、勝てる気がしたからだ。」

「勝てる気が？」

エリナが首をかしげる。

「お前にみんなが付いて来てるだろ！？」

「でも……私なんて軍を率いる資格なんてないですよ……」

落ち込み気味な発言をしたエリナに向かつてタクミは、

「エリナが軍を引っ張つていけ、そして俺がお前の頭となつて引っ張つてやるから心配するな。」

タクミがやさしい笑みを見せながらエリナに言つたため。

エリナは、呆然としつつ頬が少し赤くなる

「何ですか？急にそんなこと言ひだして」

「エリナにこれだけは言ひたかったからな」

「そうですか」

そうして、月の下で一人は、仲をより仲良くなり、魔王軍は踊つて舞つた。

朝日が見えるころに・・・・・

「大変だ～大変だ～人族の部隊が来た～」  
偵察に出ていたゴブリンが慌てて伝達してきた。

「ふわあ～～～寝み～」

あぐびを殺しながら髪をぼさぼさとかいでいる。

「そんなこと言わずに、どうするんですか？」

自信満々な顔で

「昨日行つただろう、俺がエリナの頭になつて引っ張つてやるつて

「そうですけど……」

タクミは立ち上がり

「よし、人族を迎え撃つぞ！！」

魔族と人族の戦いが始まろうとしている。

## 第七話 「全軍停止…！」のまま陣形を整えひー！」

タクミ達は、敵の兵力を探るため最初に偵察を出した。

そして1・2時間したら偵察に出したゴブリンが返ってくる。

「兵力はどれくらいだ？」

「1000後半ぐらいです」

あいまだが、見ただけで数を数えるのは難しいから仕方ない。

「倍ですか……」

エリスは、タクミの方を見る。

「倍だな！よし、今から作戦を言つゞぞ」

タクミは、兵力など関係ないかのような雰囲気を出している。

「大丈夫なんですか？数も不利ですし、地形も左右が山に囲まれて

いて、一本道みたいなところなんですから」

不安の要素がたくさんあつたためエリスは、大丈夫なのか心配している。

「ああまかせとけ！」

タクミは、魔剣の事しか想えていなかつた。眼中になかつたのだ。

敵の事など……

場所が変わつて、人族の軍隊。

「申し上げます。敵は、前方に陣を張つておひ、横長い陣を引いておひります。数は、不明です。」

若い偵察兵が指揮官の所まで来る。

「なんだと！ どうしてもつと、詳しく調べなかつた。それでは、兵力もわからんではないか！」

戦いをはじてているというのに、右手にビールのジョッキをもち、イスに深くもたれかかつている人物がこの部隊の指揮官が言つた。

「くそつ！ これでは、作戦がたてれんではないか！」

机にジョッキを思いつきり置いた。

その音に驚いた若者は、そそくさと出て行つた。

そして、横に控えていたいかにもエリートの士官学校を出ましたみたいな人が指揮官の前にきた。

実際そうなのだが。

「魔族におそるに足りません。ここは兵力で押していきましょう。」

「まあ、そうなんだが」

指揮官は、経験上では危ないと思つたがこの参謀は有能なことから士官学校から派遣されてきたためある程度は言つことを聞かなければならない。

「ふむ、お前に任せみてよ」

「ははつ、ありがとうございます。それでは、横一列に並んでいるので三つに部隊を分けてそれぞれでぶつけていきたいと思います。指揮官の目が少し大きくなる。」

「部隊を三つに分けるのか……まあいいだろ。編成もお前に任せる」

「わかりました。お任せください。」

そうして、若い参謀は出て行つた。

「グスバルね……あいつは使えるのだろうか？」

グスバルと呼ばれる若い士官は、着々と準備を開始した。

そして、僅過ぎのころグスバルは、部隊を三つに分けてそれぞれ、歩兵同士の戦闘が起きるかと思つたが、敵は逃げて行つた。

「ふんっ、やはり魔族なんてただのクズだな！」

そして、顔のおでこあたりに手を置き笑つている。しかし彼自身きづいていなかつた。

これがすべて読まれていることを……

山の中に、大勢の兵力と一人の人物が潜んでいた。

「やつぱり、こう来たか」

タクミは、笑つているまるで獣を追いこんでいるような感じで

「タクミさんどうして、三つぐらいに部隊を分けるなんてわかつたんですか？」

ちよつと疑問を持ったのか小声で聞いている。

「それは、横一列に並んでいるときに一番気を付けないといけないのが、横からの挾撃だ。そしてそれを効果的に防ぐために、分散させてのだろうがあの部隊の指揮官か参謀の腕はそこで終わりだ。本質を分かつていない。」「本質ですか？」頭の上にはてなマークが浮かんでいる。「ああ、部隊を分けるつて事は兵力を分割して数が少なくなつていて。だから隠れている部隊でも十分に対応が出来る。こいつ時に便利だよなスケルトンって」

タクミは、スケルトンがただの「ゴミだ」という考え方を改めた。

ただしエリスからするといぐら死なないからと言つても捨て駒みたいに扱うことを少しだめらつてゐる。

「まだ…なんですか?」

スケルトンの人たちをかわいそうに思つたエリスは急かすようにタクミに話しかける。

「もうちょっとだ……」

そして、山の中でひつそりと息を静めていることを知らないグスバルは、勝てると確信したために慢心している。

「そのまま押し切つて!……！」

そのまま勝てるかのよつに思えた戦場。しかし、グスバルの見た光景は、悪夢だつた。

三つの部隊のうち、左右の部隊が魔族によつて攻撃されていたのだ。

「魔族にあれだけの兵力があつたのか!？」

確かに目の前の光景は信じられないことが多いだろう。

「申し上げます。」

傷だらけの兵がこちらに方向を持つてきた。

「中央の部隊からですが、敵主力だと思われていた部隊は、少數しかいません!!」

その兵士が悲痛な叫びが戦場に流れる。

「そりか……」

グスバルは、敵の戦術に見事にはまつたことに気付く。  
そして、愕然とする。

少し<sup>とき</sup>時は戻つて

「あと少しだ。落ち着け～」

タクミはエリスの肩に手を置きながら言つ。

「落ち着いてます。」

先ほどの雰囲<sup>き</sup>とは変わつっていた。

そして、敵部隊が真横に来たところで

「全軍！突撃！..」

「「「「「「「おお——————..」」」」」」」

雄叫びが鳴り響き魔王軍は、敵部隊に向かつて攻撃を開始した。

そしたら、その勢いにのまれて押されて中央に人族の軍が集まり、  
だんだんと包囲される形が出来てきた。

三方を囲んで、後ろだけ開けている三日月型の陣形が完成した。

「なんで、後ろを開けておくんですか？」

エリス達は、全体がある程度見える丘に来ていた。

「それは、困ると敵が追い詰められたと自覚して最後の奮戦をしてこちらの被害が多くなっちゃう。でも、一か所だけ開けておくとそこに逃げると思ってどんどん逃げてくれるから、その後ろから攻撃したほうがこちらの被害が減るからこの陣形なんだ。」

「なるほど」

エリスは、納得した顔を見せた時にタクミの叫んだ通りに敵は逃げ始めてこちらが追う形となつた。

敵を散々追い回して途中で

「全軍停止……」のまま陣形を整えろ。」

タクミの言葉で敵を追つのをやめ始める。

「こなんもんでいいだらう。」

タクミは、魔王軍の強さを確認できた意味でも今回の戦いは有意義だった。

「そうですね！」

エリスは、タクミの作戦がしっかりとあることを知つて内心驚いている。

いつもボケツとして何にもできんうになつていてるのに今のタクミは、単純にいくつも作戦を考えてしまつて実行しているところがすげーと思つた。

「こまま、一気に進もう。魔剣の眠る森まで。」

タク//の言葉で全軍は動き始めた。

## 第八話 「おひおひ、言わとひちひない……」

グスバルは、逃げて行っている部隊を見て何も言えなかつた。

「グスバル…お前の慢心が招いた敗北だな  
いつの間にか指揮官の男が来ていた。

「すいません。ゴルバ殿」

頭を下げて誤つてゐるがその顔はくやしさで唇をかんでいる。

ゴルバというのは、今回の指揮官の名前で勇猛果敢だが上官の命令  
意を聞かないため部隊長どまりの男である。

「次は、俺が指揮をする

「次?」

今回の戦いは惨敗で終わつたにも関わらずゴルバは次の機会を狙つ  
ていた。

「次ですか……」

「ああ、もうすぐで増援の部隊が1000人、来ることになつてい  
る。それと今の部隊を合わせて再度叩くぞ!—!—!」

ゴルバは自信満々で魔王軍の事を狙いつつ退却するのであつた。

一方魔王軍は、そのまま魔剣の眠る森へと進んでいた。

「魔剣つてどんなものなんだ?」

「人が並んで歩いているときにタクミが聞く。

「お父様が持ついたものです。名前はダーインスレイブと言います。

「

「ダーインスレイブ……」

名前からして魔剣っぽくタクミ自身持てるのか自信がなくなっている。

「これは、お父様から聞いただけなんですけど、なんでも戦場を一瞬でか減る事が出来るらしいです。実際お父様の攻撃で戦場が変わるので何回も見てきましたから」

「戦場が一瞬で……」

タクミは、その魔剣を手に入れれば魔王軍をかなりいい所まで立て直せると確信した。

「それじゃあ、速く取りにいかないとな

「もう、待つてくださいよ～タクミさん！」

タクミの歩幅が大きくなり駆け足氣味で歩いていくのにエリスは後ろからつづいて行く。

夕方あたりに差し掛かり野営することになった。

本当なら今日中に着く予定だったが戦闘をしたために一回休息を取る必要があったのだ。

「あと、少しだな

タクミは、もう少しで魔剣の所に行けるという高揚感に浸っていた。

「もう、子供見たいですよ。タクミさん

エリスは、そんなタクミが面白くて笑う。

「タクミさん、少し頭を冷やしに行つてきた方がいいですよ

「… そうかもな」

タク!!自身とでも興奮していることに気付いたので

すこし、雑木林の中へ行く。

「しかし、本当にありえないことだらけだよな……魔剣とか魔法とかRPGだけかと思つてたのにな」

そんな風に感慨にふけていると

「助けてください……！」

急に女人の人のかわいらしき叫びが聞こえた。

「うん……」いや、前に聞いたことあるやつな……」

少し考えてみてもわからなかつたためいて見る」とい  
そして、腰にかかつてゐる剣の鞘の部分を持ちながら声のする方へ  
向かつていつた。

「助けてください……」

月明かりが木によつて防がれており少薄暗い林の中にその人物がいた。

「お前は、骨子か……」

前に「飯の時に呼びかけてくれたスケルトンの骨子がいた。

「…で…何で頭だけなんだ。」

骨子は、頭蓋骨の頭だけこけらを見ていた。

「私 転んで体がバラバラになっちゃったんですね。」「バラバラ……」

周りを見てみると、確かに骨らしきものが散らばっている。

「タクミさん、直してください…！」

頭蓋骨の口の部分だけが動いている。

「これを、直すのか…？」

周囲には、三ヶタ行くのではないかと思えるぐらこの骨が散らばっている。

「お願いしますよ～～～」

「いや…俺には無理だ。ありがとな骨子。」」飯のときによく読んでくれて」

タクミが後ろを向いて帰ろうとして

「ちょっと待つてくださいタクミさんひどいわよ。」

骨子の叫んでいる。

「私なんて戦場でも体に触れるだけでバラバラになってしまってその後に体中を踏まれるだけな存在ですけど助けてくださいよ～～～」

「それは何ていうか…残念だな」

タクミは、振り返つて言つ。

「残念でもいいですから助けてくださいよ～～～」

骨子の口が力チカチ言つていてる。

「あ、わかつたよ！」

そうして、タクミは、骨子の修理を開始した。

「えーと、ここは、これでいいのか？」

「違いますよ、なんで手と足が同じところへついているんですか？」

「ああ一面倒くさい！！」

その後ちがはいとひの直つてこも

「ふう――終わつた。」

ようやく骨子の体が戻ったのだ。

い、たゞ何時間たたかんた  
頃のう二つの汗を三、四度ハ吸ら

「タカラヅカさん、あつがとうござります。それでなーいで

「おい、骨子走つていくと…」

骨が散らばる音がした。

「お二ねー、おまえさんいつでもいい……」

田の前には、骨子の骨が散らばっている。

「タク//ヤー————ん————！」

「わかつたのみ直してやる」

その後さつきと回じ通りに直していく

「やあがに一回やつたことがあるだけに早く終わつたぜー」

タクミは、このことを自分で言ってなんだか切なくなつた。

「ありがとうございます」

骨子がお礼を言ひ。

「ああ、ゆつくり帰れよ」

そのまま、骨子とは別行動をとつた。

「大丈夫かなあいつ……」

タクミは、骨子のことを少しだけ心配した。

でも、

「スケルトンの組み立てに慣れても得ないな……」  
ちょつと損したようなよくわからない気持ちになつた。

戻つていくと

「タクミさん……どこ行つてたんですか！？」

エリスは、心配そうな顔をした。

「ああちょつとな……」

エリスに心配させることに申し訳なさを感じるが骨子の事はあまり話したくなかった。

なんせこっちに来て一番疲れたことだからだ。

「そうですか……」

エリスは、小さくうなづいた。

夜が更けて行く。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7366x/>

---

魔王と勇者のタクティクス

2011年10月29日20時57分発行